

## ● シリーズ 私の見た日本 Vol.165

## 新天地

黄士娟(こう・し・けん)

2005年東京大学建築学科博士課程卒業。  
2013～国立台北芸術大学建築及び文化資産研究所所長。  
著作：『建築技術官僚與殖民地經營1895-1922』、2012年国立台北芸術大学及び遠流出版社出版。



日本の最南端はどこでしょう? と聞かれたとき、なんと答えますか? 石垣島? 沖ノ鳥島? おとっと、ちょっとお待ちください。時間の軸、つまりいつの時点の日本のことなのかをまず確認しないと! 1895年、日本の最南端は台湾島でした。さて本日は、あの時の日本最南端で、日本人の先輩たちが残した軌跡を見てみましょう。

## インフラ—水道

1895年(明治28)、多くの人たちが台湾島に夢を託してやってきました。けれども待っていたのは厳しい衛生状況による病死でした。この1年間において、軍事作戦で亡くなった人が164人であるのに対し、マラリアなどの病気で亡くなった人は4,642人に上りました。新天地での仕事は命懸けだったのです。台湾総督府にとって、衛生は最優先で改善すべき課題となりました。1887(明治20)年イギリス技師パーマー(Henry Spencer Palmer)氏により横浜水道が完成したことから、台湾総督府民政局長の後藤新平は、東京・神戸・福岡・岡山等で上下水道設計に実績を持つバルトン(William Kinninmond Burton)を呼び、翌年1896(明治29)年に「台北給水工事設計報告書」を完成させ、1899(明治32)年、台湾初の淡水滬尾水道を竣工しました。台湾での始政から4年後のことでした。この水道は長さわずか6,832mと、規模としては小さいながらも、建材の準備は手厚いものでした。水道の鉄パイプはすべてイギリスからの輸入品です。1899(明治32)年、マラリアと赤痢の感染症で43歳のバルトンは亡くなりました。けれども、幕を開けた水道を始めとする台湾のインフラ建設はストップしませんでした。バルトンの生徒である浜野彌四郎は台北水道、台南水道などを次々と完成させました。ゆえに、浜野彌四郎は台湾水道の父と呼ばれ、1921(大正10)年台南水道の山上浄水場に浜野彌四郎の記念碑を建てました。記念碑を立てた当時は浜野

彌四郎の銅像がありましたが、第二次世界大戦中に「金属類回収令」により撤去されました。2005年、銅像は奇美実業の許文龍より再建しました。

水道だけではなく、ダム、鉄道、通信、電力など、台湾のインフラ整備は日本時代から急速に進められ、台湾社会の近代化に大きな貢献をしました。これらの設備の大半は現在でも使用しています。

## 都市計画—台湾家屋建築規則

台湾という南島の地では、いたる所に「騎楼」というアーケード状の建築様式が見られます。これは台湾が亜熱帯に位置しているからです。梅雨明けから5カ月ほど暑い日々が続くため、学校の夏休みは2カ月もあります。街を歩くとときに「騎楼」があれば、強い日差しと、しばしば午後以降に降るにわか雨を避けられます。この建築様式は清朝の時代からすでに見られます。しかし、高さや幅などの規制はなく施主ごとに自由に建築されたため、町全体は不規則に自然な進展を遂げました。その後1900(明治33)年に公布した「台湾家屋建築規則」によって、細かい実施項目が作られました。この「規則」により、道路に面する店屋には庇がある歩道(騎楼)の設置を求められました。1910(明治43)年、台北は大きな台風襲われ甚大な損害を被り、台湾総督府はこれをきっかけに、台北駅前の府後街(現在の館前路)の大掛かりな改造改善計画を立てました。営繕課の技師たちは通り沿いの町屋のファサードを鮮やかな洋風デザインに統一し、一階廊下部分の騎楼が分断されることなく貫通したアーケードを完成させたのです。完成した1915(明治48)年当時、府後街は台湾で最も立派な商店街に変身しました。台北市の町名改正があった1922(大正11)年、府後街は台北駅と台湾総督府博物館(今の台湾博物館)の間に位置することから、「表町通」に改名しました。清朝時代の台北府の裏道が日本時代のメイン通りへと変身したことは、

通りの名称の変化からもわかります。

この成功した改正計画は、その後台湾各地に広がります。細かい項目は各地方それぞれの基準となっていますが、共通点はデザインが統一したファサードと騎楼を持つことです。台北市の迪化街、桃園市の大溪など各地の商店街もそれにない改正していきました。これらの商店街は、今は「老街」と呼ばれ、多くの観光客で賑わっています。騎楼や、これを管理する制度や都市計画自体が、台湾の状況に適して新しく作り上げられたシステムといえます。土地の私有権と相対する大衆が通るための利便性などの矛盾といった課題も抱えていますが、台湾の市街地の近代化と都市計画の適応性が窺えるです。

## 建材—化粧煉瓦とタイル

化粧煉瓦とタイルは、1895(明治28)年の内国勸業博覧会で初めて紹介された建材です。総督府営繕課技師の森山松之助は、いち早く台湾に取り入れました。森山がデザインした土木部庁舎(1908年着工・1909年竣工)の外壁には日本から運んだ化粧煉瓦が使用されています。化粧煉瓦をとくに大量に用いたのは1919(大正8)年に竣工した総督府庁舎で、これは1914(大正3)年竣工の東京駅よりもやや遅い建築です。総督府と東京駅の両方が化粧煉瓦を外壁にしたことから煉瓦造に勘違いされやすいですが、じつは、総督府は鉄筋コンクリート造で、東京駅は鉄骨造です。

その後出現したスクラッチタイルも鉄筋コンクリート造の外壁に使用されます。同じく森山がデザインした台湾総督府交通局通信部庁舎(1921年着工・1924年竣工)が台湾初の使用例ですが、ここには日本の帝国ホテル(1919年着工・1923年竣工)の外壁と同じ仕様のスクラッチタイルが使われました。米国のライトが設計した帝国ホテルが東京大震災に耐えたことから、レンガ造の時代にピリオドをつけました。当時日本から輸入したタイルは高価なので、コストダウンのために、



1.滬尾水道



2.浜野彌四郎の記念碑



3.府後街通り及び台湾博物館(台湾写真帖第一集) 1915年、台湾写真会



4.台北市迪化街



5.總統府(元総督府)



6.司法ビル(元高等法院)



7.台湾製スクラッチタイル(元高等法院に使われた)



8.電話交換室。《台湾鉄筋コンクリート構造物写真帖》、1913年



9.台北賓館(元総督官邸)



10.台湾大学医院(元台北医院)

台湾でのスクラッチタイルの研究開発および製造が進められまして、最終的にタイルの製造技術を習得しました。このため、台湾現存の歴史的建造物のスクラッチタイルはほとんど台湾製です。また、タイル自体はカビができません、メンテナンスが容易なことから、今の台湾建築の外壁は「二丁掛」と呼ばれるタイルをよく使用しています。これも日本のタイルのおかげです。

## 建築構造—RC

台湾の日本時代初期は木造建築が多く、木材には松や杉などを用いましたが、白アリによる虫害で建物は短命でした。大金をかけて建てられた総督府官邸も激しい被害により十年足らずで使えなくなりました。そこで総督府技師たちが見つけた打開策は新建材の鉄筋コンクリートでした。当時、鉄筋コンクリートに関する技術はまだ発達しておらず、台湾の技師たちは米国の書籍を参考に構造計算していました。土木技師の十川嘉太郎が鉄筋コンクリートを永久兵營の屋根に取り入れたのは1900(明治33)年のことです。1902年(明治35)、「剛論争」で有名になった真島健三郎はフランス語の書籍を読みながら、唧筒室(ポ

ンプ室)の柱に用いました。台湾では1900年代から鉄筋コンクリートをベランダ、ドームなどの部分に実験的に導入してきました。そしてついに、台湾初の完全な鉄筋コンクリート造となる台北市電話交換所は、1909(明治42)年に建てられました。1911(明治44)年建築の日本本土の三井物産横浜支店(三井物産横浜ビル)より2年早いです。台湾の気候などの条件により、日本人が好む木造建築が向いていなかったため、鉄筋コンクリートの技術が進んだのかもしれませんが。

植民地だから、文化も建築も「内地」より遅れていたと思われがちですが、前述のように、台湾総督府は組織的に台湾に適した都市と建築のシステムを構築しようとしていました。その元となる考え方や建材などは日本に既存のものもあれば、まったく新たに創り出したものもあったのです。それらによってつくられた台湾自身も、日本に似ていますが、なんだかどことなくちがいます。こうしたことから、当時総督府に務めた技師をはじめとする先人たちが開拓性を持っていたことが窺えます。この開拓性こそが、祖国を離れた人々が新天地の台湾において見せた、都市計画・建材・構造などの分野での優れた成績の要因なのです。また、これら若手の技師

たちを台湾に呼ぶことができたのは優れた給与システムがあったためでした。台湾総督府から1896(明治29)年に公布された「台湾総督府職員官等俸給令」によると、各級の判任官は内地での着任・転任の1年後に昇進可能なのに対し、台湾では着任・転任した時点で昇進が可能となり、しかも給等6以下の者は連続2回もの昇進が可能でした。また、職歴も内地より1.5倍に計上されます。つまり、台湾で10年間働けば、内地での15年間の職歴と同じように計算されたのです。この優遇された給与システムを背景として、台湾でのキャリアアップを経て「内地」にて新事業を始めた若者は少なくありません。森山松之助、野村一郎、近藤十郎などは総督府退職後に内地で建築事務所を開きました。彼らは辰野金吾の教え子で、卒業後間もなく台湾に着任し数多くの作品を生み出したことは、台湾がチャンスに満ちた新天地であることを証明しています。この新天地は、若者が腕を見せる主人公となりました。台湾もこの人たちの努力と貢献により近代化に進んだのです。

さ〜、読者の皆さん、あなたにとって、新天地はどこにあるでしょうか?この新天地でああなたはどのように展開しますか?